

語り手 重田澄子さん
タイトル 「女ひとり」

はじめに

令和四年春、まだ街中に桜の花びらがあちこちに残っているころ、デイサービス「ソラノイロ」でシゲさんと初めてお会いしました。

そのころ、シゲさんは圧迫骨折で退院してきたばかりで、腰痛があり幅広のコルセットを手放せませんでした。

そのときに、休み休みの活動しかできないシゲさんが、デイルームのソファアールで小休憩しながら語ってくれました。この本は、そのお話の数々をシゲさんの語りこゝとばで書いて収めてあります。

お話の中から、その時々いろいろな想いが、読まれる方にも伝わりますように。

小さいときの思い出

両親のことはあまり思い出せないんだけど・・

母はね、下町の生まれだったから、お三味線とか踊りとか習っていた人でした。そういえば、私はね、昔から頼られることが多くて。

昔のことだけど、家の外で何か不審な様子があるとね、母が私に言うの・・「ちいちゃん、ちよつと外を見てきてくれない？」って。私は怖がりもせず見に行つてくるの。いつも何にもないんだけどね。

大の大人の母が子供の私に頼むなんて変でしょ。うふふ。

母の実家で

私は十一のときに両親に死なれたでしょ。

それから、長野にある母の実家で祖父母に育てられたの。

おじいさんは、群馬の赤城山麓の百姓の出身でね、そのあと製糸工場で働いてい

た人。私が行ったときは、襖や障子の張替えをする表具屋さんでね、お弟子さんを何人も抱えていたの。

姉は先に行っていて、あまちゃんでおばあさんにべったり。末っ子の妹もおばあさんにべったり。

でも、私はおじいさん子でね。おじいさんは、私にだけ、日本舞踊や三味線を習わせてくれたの。夜にお酒を飲むときには、私をおじいさんの目の前に座らせてね、お魚とか一緒に食べさせてもらって・・・。



すっかりした人で、尊敬していました。

母には弟がいたんだけど、跡継ぎにはなれなくてね。おじいさんは残念だったでしょうね。とにかく、私たちは、遠慮することや、肩身が狭い思いをせずのびのび育ててもらいました。

戦争はね、田舎だったからそんなに空襲などで怖い思いはしませんでした。

上京

姉も妹もあまちゃんだったでしょ。だから、私は自分でしつかりしなくちゃと思っていたの。三人のうち、一番早く東京に出てきたのは私でした。昭和三十年頃だったかな。

知り合いの人の紹介で、池之端にある鳥料理のお店に、住み込みのお運びさんとして入ったの。「三善（さんぜん）」っていうお店だね。

そのお店には、有名人や大物がたくさん来ていてね。

その後長くお付き合いすることになる人とも出会った、ご縁のある場所なのよ。

女社長さん

そのなかのお一人にね、ご主人を亡くした後、会社経営を引き継がれた方がいて、親しくしていただいたの。一ツ橋大学初代学長がお父さんという方だね、初めの結婚ではうまくいかず、二回目に松下幸之助の甥に見染められた方なの。ご主人の会



社は蛍光灯を作っていたんじゃないかな。彼女は通訳代わりになってご主人と世界旅行を楽しむほど、語学堪能な方なの。その方のお母様が亡くなる前は、しばらくおウチに伺ってお世話したのよ。

そしてね、その方が亡くなったときは、私が仕立てた死装束を着せて見送ったの。あれから、二十年近くたつのかしらねえ。

豪華旅行

その方とはとっても楽しい思い出もあるの。

シンガポールに連れて行ってくれたときには、一番贅沢な、シャングリ・ラホテルに三泊しました。そして、現地にある軍人と日韓人の戦没者墓地の慰霊に回りました。シンガポールの次に香港に寄って、ザ・リッツ・カールトン、マンダリン オリエンタル、フォーシーズンズ、ザ・ペニンシュラ、と有名なホテルに泊まらせてく

れてね。海外旅行も慣れている方と一緒にだから、何の心配もなく遊んできました。

姉たちとの暮らし

そうそう、鳥屋さんは二年くらいで辞めてね、姉が上京し、結婚して荒川に住み始めたところに行つて、一緒に住み始めたの。姉の夫は下水道局が勤め先だったので、都の職員住宅だったような気がします。由美という一人娘がいてね、その子が成人するくらいまで一緒に住んでいました。

今は、その姪が何かと手伝つてくれます。

着付けの先生

その鳥屋さんを辞めたときにね、小さいとき日本舞踊を習っていたから着物は好きだったし、手に職をつけなきゃと思つて、着付けの講師になつたの。

講師になつてから、ずいぶんあちこちに教えに行つたけど、三菱銀行の女子寮で

着付けを教えていたのが一番大きかった所かしら。100人を教えていたこともあるのよ。

みんな出稼ぎの子だったから、寂しい子もたくさんいてね。成人式のときは大勢の子の着付けで大変でした。

そのうちの一人はずっとお付き合いが続いているの。子供の浴衣を着せてくれてきたこともあり、今もご連絡しあっています。



妹の病気

妹はね、まだ小さいうちに自分の子供を亡くしてしまったの。

それからおかしくなつてね・・・離婚することにまであつて。

病院に入院してからはずっと私が仕送りをしてきたの。姉は結婚して家庭があり、自分の子供もいて経済的に大変だったでしょ。だから、私が妹の面倒を見るしかな

かったのよ。そう四十年ほどずっと・・・最期までね。

入院費やらなにやら、しばらくは本当に大変だった・・・だいが後になってから、ようやく生活保護を受けることができるようになって、少しの助けにはなったけど・・・。

だから、私は結婚どころじゃなかったし、結婚する相手に助けてもらおうなんてとても思えなかったのよ。だから、このとおり、ずっと一人で。ふふっ。

ステキな人はみんな既婚者

そうね、三十代から四十代にかけて・・・そう、妹の病気が始まる前のところかしら。

あのころは、忙しかったけど充実してたし、楽しかった。

有楽町とか、新橋とか行くでしょ、そうするとね、男の人がついてくるわけ・・・。
なんでかって？

あのあたりは芸者さんがいるところだったでしょ。だから、着物を着て歩いてい

ると間違われるのね。追いかけて逃げたこともあったわ。ふふふ。

好きな人？

ふふふ、そうね、そういう人も何人かいたけど、ステキな人はみんな結婚しているような人ばかり。

着付けを教えに行っていた三菱銀行さんとか、資生

堂さんの部長さんや重役さんと打ち合わせするでしょ。そんなときにお食事に関連して行くってくれるわけ。そんな部長さんたちの中には、ステキな方がいましたよ。営業職ではなくて、事務系の方だから誠実な感じだね。でも、そこでおしまい。だって、みんな奥さんがいるような人だったからね。

私の好きなタイプ？

うーん、学者タイプかな。ふふふ。



そういえば、そんな中に、海軍中將のお父さまをシンガポールで亡くされたという方がいらしてね。私がシンガポール旅行のときに、戦没者の慰霊に回ったことがあったので、奇遇なご縁に驚きました。でも、それ以上にとても感謝されたことがあります。

治っちゃった病気

血液のがん（悪性リンパ腫）で入院したときには、もう余命数か月と言われ、私よりも妹を驚かせてしまったわ・・・。

でもね、不思議。何回かの抗がん剤の治療ですっかり治っちゃったの。もうがん細胞がどこにも残っていないの。すごいでしょ。ふふふ。

死ぬことを考え始めたのは、このときから・・・十年くらい前になるかしらね。そのときから、厚生中央病院には何かあるたびに何回も入院しているの。みなさ

ん良くしてくれる良い病院ですよ。

献体登録

私は、結婚しないで生涯独身できたでしょ。だから子供もいないしね。

自分が老いて、死んだあと誰にも迷惑かけられないでしょ。だから、献体の手続きをしているの。死んだときの連絡先は、献体する病院にすればよいことになっているの。

ほら、この手帳。

そう、丁太の白菊会。

あら、知っているの？そう、歴史ある有名なところなのね。

あとは、死亡診断書と埋葬許可書を病院からもらえば良いだけだね、お墓の心配はいらないの。

目黒区役所の窓口で話したら、係の人に「そういう人がいると助かるんです」っ

ていわれたの。

そおーなの。身寄りのない人が亡くなったあと、埋葬する場所がなくて区も困っているっていうことなの。だから、助かるってね。

死んだあとのこと？

いやいや、私は考えない、考えない。

だから、怖くもないしね。

とにかく亡くなったあと、誰にも迷惑かけずにきれいなさっぱり。それでもう安心なの。

姪にこの話をしたら、「じゃ、おばちゃんのお参りはどこにいけばよいの?」なんて聞かれて困っちゃったけどね。

お骨は、千葉の共同墓地に埋葬してもらったことになっているから安心しています。

骨折

今年になってから、ちょっとしたことでも腰椎圧迫骨折しちゃって、ついこの前まで入院していたの。まだ少し不安でコルセットをつけているんだけど、胸まであつて苦しいの。この胸まであるコルセットはつけるのが本当に大変なのよ。だからベッドに横になってなんとかつけてるの。自分でやるしかないものね。

毎日の暮らし

年老いて一日を過ごすのは本当に大変よ。

でも、私は独り者で頼る人がいないから、自分でがんばるしかないの。

ごはんも自分で作るのよ。

今夜はね、タイのお刺身。

あら、みんなが食べに来たいって？ 困ったわね。あはは。



好きなもの

梅の花が好きよ。曾我の梅林がきれいでした。

着物はね、縞が好き。

そうね、大島もいわ。色は藍色。

鳥？特に好きな鳥はいないけど・・・

サギが私のイメージ？ あらそう？ふふふ。

ソラノイロ

ここでのレクリエーションは、ゲームが楽しいわ。

手作りの犬のマスクットはね、他のデイで教えてもらったの。

今度ここでも皆さんと一緒に作ろうと思ってるのよ。

Kさんがいるでしょ。私と同じうなぎ年さんなの。みんながんばっている



のよ。そう、同じお仲間がいるって心強いよね。

まあ、あなたこれから他の病院の実習に行くの？

え？ちゃんとやれるか不安だって？

大丈夫、大丈夫。　しっかりやってきなさい。がんばってね。

終わったら、またお話ししましょうね。

一人で生きる女性へのメッセージ

今の時代も女性一人で生きている人はいると思うけど、本当に頑張ってほしいわ。自分一人で生きていくのは大変だと思うけど、手に職を付けるべく自分を教
育しないとね。そして誰かにそれを教えられるくらいに腕を上げることが大切だ
と思うわ。私の場合は、それが和裁と着付けだったんだけど。大変なこともある
と思うけど、自分を信じて強く生きてね。



おわりに

シゲさんが、デイの創作活動で作品をアツという間に作り上げてしまうのは、長く着付けで磨かれた手先の鍛錬の賜物だと知りました。そして、いつもしゃんと伸びている背筋は、自立した生き方を体現している姿勢そのものと感じています。

この本のタイトルを『「女ひとり」で』と言われたあの瞬間、シゲさんが多くの「ご苦労を乗り越え、一人で生き抜いてきた強い意思と誇りを感じました。そしていま、独り心豊かに日々恙なく過ごされていることに深く敬服しています。篤志のお話を聴いた私は、「鷺は立ちての跡を濁さず」と謳われているこの美しい水鳥を思い浮かべました。この鳥は強く逞しく賢いそうです。本当の強さを持っているシゲさんだからこそ、いただいた励ましは私の大きな勇気となりました。これからも、シゲさんの後が続く私たちに、多くの学びを与えていただきたく願っています。

小田原の曾我の梅林は、水戸偕楽園、埼玉の越生梅林とともに関東の三大梅林の一つのこと。その思い出や、愛読書、歌舞伎のこと・・・またお話を聞かせてい

ただくのを楽しみにしています。



令和四年十月吉日 上智大学グリーンフケア研究所資格認定課程在籍 鈴木礼子